久留米大学

私立大学研究ブランディング事業
成果報告書

学校法人番号	４０１００２	学校法人名	久留米大学		
大学名	久留米大学				
事業名	すこやかな「次代」と「人」を創る研究拠点大学へ ～先端がん治療・研究による挑戦～				
申請タイプ	タイプA	支援期間	3年	収容定員	６，０１１人
参画組織	先端癌治療研究センター、大学院医学研究科、医学部、がんワクチンセンター、大学病院、バイオ統計センター、臨床研究センター、人間健康学部、大学院心理学研究科				
事業概要	がんペプチドワクチン等のテーラーメイドがん治療の開発普及を推進するとともに、新たな強みとなる潜在的シーズを発掘し、がんの新規治療法や予防法の開発へとつなげるモデルを構築する。 同時に、組織の教育研究力強化とPR・コミュニケーション活動の強化を進め、「地域に根ざした先端研究」「地域に根ざした医療」を実践し、地域社会経済の発展・深化及び地方創生に全学を挙げて寄与するものである。				
事業目的	**背景：がん患者増が見込まれる北部九州** 「真理と正義を探求し、人間愛と人間尊重を希求して、高い理想をもった人間性豊かな実践的人材の育成を目指すとともに、地域文化に光を与え、その輝きを世界に伝え、人類の平和に貢献することを使命とする」を基本理念とする久留米大学（以下「本学」という）は、地域社会と密接な提携と協力関係の下、1928年の開学以来の歴史を刻み、発展してきた。**九州医学専門学校の創設、及び附属病院の開設を起点にした生い立ちの下、特に地域における医師の養成や社会が求める人材の育成に取り組んできた。** 本学が立地する久留米市の大きな特徴は「医者の街」と言われるほど医療体制が充実していることである。政令市・中核市のうち人口当たりの医師数が多く（人口10万人あたり医師数が568.5人）、病院・診療所数も全国6位である（2012年調査）。 本学は、創設以来、こうした久留米市をはじめとした北部九州地域の医療福祉面での発展を長く支えてきた。**医療福祉分野を中心とし、地元久留米市や福岡県といった地域社会に好影響を与えるような、学識と専門技術に関わる教育と研究が最大の強みであり、特色**である。 一方、北部九州地域においても、今後人口減少と高齢化の一層の進展が予想されている。特に、今や国民の2～3人に1人が罹患するがんに関しては、全国的に見ても北部九州は死亡率が高く、特に肝がんは突出しており、予後がきわめて不良である。今後の高齢化に伴い、**がんの問題に地域がどう向き合うかが重要な課題**である。 **経緯：「がん征圧」に向けた戦略の推進と課題** 本学病院は、その入院患者の約5割、外来患者の約2割ががん患者であり、**地域がん診療連携拠点病院として北部九州におけるがん対策の中核を担っている。**福岡県内のみならず近隣の北部九州各県や山口県、さらには日本全国及び東南アジア諸国からも受診者が訪れており、がん医療及び先進的がん治療研究に対する地域社会からの大きな期待を担い、地域との密接な連携により、がんの革新的治療法開発を推進してきた。 本学は文部科学省の「都市エリア産学官連携促進事業（一般型（2003-05年度）・発展型（2006-08年度））」、「地域イノベーションクラスタープログラム（2009-13年度）」を通じ、テーラーメイドがん治療の中核研究機関として地域とともに歩んできた。福岡県は久留米市と連携してバイオ産業拠点推進事業「福岡バイオバレープロジェクト」を推進し、久留米市も地方創生戦略「久留米市キラリ創生総合戦略」において「がんワクチンなど次世代医薬品の研究開発支援」「がん治療拠点化の推進」を掲げるなど、バイオ産業の一大拠点化を久留米地域で進めており、本学と地域とのより強力な連携が求められている。 本学の代表的な研究組織である先端癌治療研究センター（私立大学ハイテクリサーチセンター整備事業）の設立（1997年）をはじめとして、集学治療、緩和ケア、肝がん、肺がん、がんワクチンに特化した5つの診療センター、医療連携・情報共有を担当する腫瘍センター、大学院がんプロフェッショナル養成コース等を設置した。また、研究全般を支援する体制として、全国の大学に先駆け、医学・医療分野の研究で不可欠な数理学的基盤と科学的方法論を提供するバイオ統計センターを2003年に設置し、質の高い臨床研究を支援するための臨床研究支援機構を2015年に設置するなど、**本学は「がん征圧」に向け戦略的に取り組んできている。** こうした経緯を経て、ユニークかつ革新的な治療に向けた研究開発を進めているが、一般医療への普及という点では後述のとおり課題がある。また、革新的がん治療につながる潜在的研究シーズが学内には多数存在するが、実地医療への応用展開に至っていないものも多く、**今後の医療ニーズの増加を見込むと、地域社会からの期待と課題解決の間にはまだ大きなギャップが存在する**と考える。				

	方策：個別・包摂的ケアを主導する拠点へ 　このような現状を踏まえつつ、「地域文化に光を与え、その輝きを世界に伝え、人類の平和に貢献することを使命とする」本学が、地域の安心・安全、そして教育研究の質に関するステークホルダーや社会の高い期待に応えていくため、**新たながん治療・予防法の開発を加速化させることが本事業の目的**である。特に、本学がビジョンでうたう「地域に根ざした研究を通じた地域への貢献」と「地域に根ざした医療」を学内で先行して実践する拠点、また、「実際のがん医療、がん患者に役立つこと」を突き詰め、テーラーメイド（個別最適化）かつ包摂的なケアを全学で進めていく際の拠点の形成を志向するものである。 　具体的には、先端癌治療研究センターを中心に、 ○　**現在の強みであるテーラーメイドながん治療の確立に向け、テーラーメイドがんペプチドワクチン等の実用化推進と改良・次世代化を進める**とともに、 ○　**がんの新規診断法や治療法につながるような本学内の研究シーズの発掘と応用展開を進め、学内の資源・人材を戦略的に活用しながら、さまざまな課題解決に総がかりで取り組む。** 　これまでの本学での研究は、研究者個人の資質と努力に依存する形となっており、組織横断的な取り組みが十分進んでいなかったことの反省に立ち、本事業では、学長を委員長とする研究事業実施委員会の主導の下、前述の「福岡バイオバレープロジェクト」「久留米市キラリ創生総合戦略」に基づき、地域と緊密に連携し、バックキャスト型の課題解決を強化する。 　また、後述する**ブランディング戦略を通じ、本学を支える学内の教職員の意識の変容と闊達な教育研究に向けたモチベーションの向上を図るマネジメント、そして医療関係者から一般市民まで幅広い層を巻き込んだPR・コミュニケーション活動に取り組むことで、本学が有する課題解決力を最大化し、それらを総動員した上で、「すこやかな「次代」と「人」を創る大学」というブランドの形成を図る。** **【将来ビジョン】：地域貢献の具現化を視野に** 本学の基本理念に基づいた2017年度から2021年度までの5年間にわたる教育・研究・社会貢献・医療に関する将来ビジョンについて、理事長兼学長が委員長を務める「将来構想策定会議」（2016年9月～2017年3月）での闊達な議論を経て、次の柱からなるビジョン（大学の将来像）をとりまとめた。 1．私達の目指す教育とは、世の中の多様化に順応できる実践的人材の育成 2．私達の目指す研究とは、先端的研究の世界への発信、地域に根ざした研究を通じた地域への貢献 3．私達の目指す社会貢献・地方創生とは、地域との連携及び産学官との連携強化 4．私達の目指す医療とは、地域に根ざした医療の推進 　※2．については、前身の基本構想では「地域に根ざした先端的研究の世界への発信」としていたところ、地域貢献大学としての本学の目指す理想を体現する内容に変更。

私立大学研究ブランディング事業
成果報告書

学校法人番号	４０１００２	学校法人名	久留米大学
大学名	久留米大学		
事業名	すこやかな「次代」と「人」を創る研究拠点大学へ ～先端がん治療・研究による挑戦～		
事業成果	**【研究活動】** 当初3つの研究プロジェクトでスタートしたが、年2回PDCAサイクルを回すことにより計画見直しを行い、本学の独自色や魅力をより高めるために、新たに2つの研究プロジェクトを追加した。各プロジェクトの事業成果は以下のとおりである。 **プロジェクト1：テーラーメイドがんペプチドワクチンの開発** **①適応拡大のための臨床データの蓄積**：多種のがんを対象とした医師主導臨床研究を実施し、その成果を学会発表するとともに英文査読誌に18編の原著論文を発表した。なお、当該プロジェクトは本学発ベンチャーのブライトパスバイオ株式会社（東証マザーズ上場）に導出されており、米国で治験を実施中である。 **②次世代がんワクチンの標的分子の探索方法プロトタイプの動物モデルでの確立**：マウス悪性黒色腫のゲノム解析を行い、がん特異的な遺伝子変異を多数同定し、免疫誘導可能なネオ抗原とそれらを認識するT細胞受容体を明らかにし、次世代ワクチンの基盤を確立した。 **プロジェクト2：肝がん「New FP療法」の普及と質的深化** **①「New FP療法」の普及と質的深化**：若手医師を対象とした「New FP研究会」及びコメディカルを対象とした「講習会（実技含む）」を2018年より発足させ、年１回開催している。これまでに全国17施設からのべ100名以上の医師及びコメディカルが参加した。また、これらの施設とともに多施設共同研究を開始、663例の症例蓄積を行い、質的深化のための解析も実施した。 **②治療抵抗性の基礎的解析と克服**：「New FP療法」抵抗性症例の遺残した肝癌組織や周辺組織について肝がん幹細胞との相互作用の解明を行った。 **プロジェクト3：潜在的研究シーズの発掘・育成のための運用システムの確立** 2018年の学内公募では、16課題中2課題を選定、2019年の追加募集で、6課題中1課題を選定した。研究支援期間はいずれも3年とした。すでに知財の確保も進んでいることから、先行する2課題に対し、2020年にベンチャーキャピタリスト等の外部アドバイザーを交えて実用化に向けての協議を開始した。新たな強み・看板となることが期待されている。 **プロジェクト4：文医融合分野の創造** 文系と医系学部を有することは本学の強みであるが、別キャンパスにあるために相互の交流は極めて限定的であった。この強みを生かし、新たな久留米大ブランドを創造することを目的に、意見交換会を発足させ、その成果を学外に発信するために、2019年から大学公開講座「がん患者のこころのケア」（全6回、2019年）、「がんの先端医療と心のケア」（全6回、2020年開催予定）を開講した。また、文医の共同研究課題を学内公募し、2課題への支援を開始した。2019年には公開シンポジウム「医療的ケアの必要な子どもが子どもらしく生きるために」を開催し学内外から約150名の参加者があった。 **プロジェクト5：若手研究者の育成支援** 2019年度より、若手研究者支援の学内公募を開始した。若手研究者にとって将来の研究分野は流動的であることを鑑みて、研究テーマは広く「医学系全般」とした。5課題の応募の中から2課題を選定し支援を行った。 **【ブランディング（広報・普及）活動】** 本事業の経費を活用し、本学の強みの一つである「（先端）がん治療・研究」を中心にさまざまな広報・普及活動を展開した。事業成果は以下のとおりである。 **① がん教育・啓発活動：** ・ 学内（院内）の患者、患者家族へは先端がん医療の情報提供やがんの相談活動を、学外においては、がん教育・啓発活動を福岡市内にて月１回程度、定期的に実施した。また、市民公開講座や医療フォーラムを毎年実施した。特に3年目に実施した「医療フォーラム2019」は、がんの医療講演に加え、本事業に関連する学部学科の学生も参画した「文医融合」のイベントとして展開、本学の理念とする「実践的人材育成」を社会にアピールすることができた。 ・ がん対策基本法を背景に、本事業の2、3年目に高校生向けの出前授業を実施した。県内の県私立高校等を対象に公募し、応募のあった延べ15校にがん教育と啓発活動を行った。また、教員に対するがん教育を、養護教員の研修会や教員免許状更新講習で実施した。 ・ 本学が実施している公開講座の中に「がん」に関わる教職員が学部を越え参加、「がんの先端医療と心のケア」をテーマにシリーズ化し実施した。 **② 各種メディアを使った広報活動：** ホームページの制作・拡充や各種冊子物の発刊、PR動画の製作及び各種イベントに伴う新聞紙面掲載等により広報活動を展開した。 これらの活動の評価指標の一つとした、市民公開講座や医療フォーラム、高校への出前授業における参加者アンケートでは満足度も高く、次年度以降の開催を望む声も多かった。また、本事業のホームページのアクセス数も順調に伸びており、日経BPの大学ブランドイメージ調査（2019-2020九州・山口版）でも、大学全体で13位と過去最高位となるなど、事業で行った活動の手ごたえも感じられるところである。		

今後の事業成果の活用・展開	新型コロナウイルス感染症の世界的大流行は多くの命を奪い、経済活動に大きな打撃を与え、社会は今大きな変革の時を迎えている。しかしながら、感染症以外の病気と人との関わりに及ぼすインパクトはさほど大きくなく、当該事業で培われた研究成果・戦略はアフターコロナ社会においても十分に通用し、活用、更には展開すべきものと思われる。 本事業は、5年計画として立案され、2017年（平成29年）度に採択されたものである。本来であれば2021年度まで文部科学省からの支援が継続される予定であったが、2019年度末、事業半ばで支援打ち切りとなるも、本学としては、目標とする成果を得るべく、規模は縮小するものの、当初計画通り2021年度まで本学の自己資金により事業を継続することが機関決定されている。 【研究活動】 以下、個別のプロジェクトについて、今後の活用・展開について述べる。 プロジェクト1：テーラーメイドがんペプチドワクチンの開発 本事業で得られた研究成果に立脚して、次世代ワクチンの基盤となる動物モデルでの研究を科学研究費を活用し今後も継続していく予定である。得られた成果についてはベンチャーへの導出等により実用化を目指す。 プロジェクト2：肝がん「New FP療法」の普及と質的深化 自己資金により「New FP研究会」「講習会」を継続開催し、国内外への普及を目指す。また、多施設共同臨床研究を継続するとともに、科学研究費等を活用し治療抵抗性の基礎的解析と克服を目指す。 プロジェクト3：潜在的研究シーズの発掘・育成のための運用システムの確立 自己資金により支援を継続するとともに、ベンチャーキャピタリスト等の学外アドバイザーと協議を重ね、期間内に実用化の目途をつける。得られたシーズ発掘・育成のノウハウは今後の学内の研究推進戦略センターの活動や学内研究資金配分等に活用していく。 プロジェクト4：文医融合分野の創造 2つの研究課題に対する支援ならびに大学公開講座の開講は自己資金により継続していく。これらは、本学の特色を生かした文医融合分野の創造であり、新たな強み・広告塔として久留米大ブランドの構築に活用していく。 プロジェクト5：若手研究者の育成支援 本事業での支援は打ち切りとなるが、若手研究者の育成は本学の将来にとって極めて重要な課題である。従来より行っている本学独自の研究基金・助成金等による若手研究者支援を継続するとともに、科学研究費獲得のためのセミナーや申請書作成支援等をさらに充実させていくことにより、若手研究者の育成を推進していく。 【ブランディング（広報・普及）活動】 本学の特色とも言える「研究」を主軸としながら「がん医療」を中心に、がん教育・啓発活動を引き続き推進していく。また、学部を越え文医が連携した取り組みと、さらにデータサイエンス領域を加え発展させ、社会のニーズに合わせた情報発信を行い、「がんと共生する時代」の地域における　がん教育・啓発の牽引役として、積極的な取り組みを行っていく。そこに関わる研究者・医療従事者をはじめとし、将来社会で活躍する人材として学生を表現することで、本学における「人・育成・成長」をキーワードに今後もアピールにつなげる。 このような「がん治療・研究」の積極的な発信、発展的展開は、住みやすい街づくりを目指す「医療のまち久留米」のブランド力向上にもつながるものであり、今後も久留米市との連携を強化しながら、市と共にブランド力を高めるべく広報活動を展開していく。さらに他の地域の自治体とも連携を推進しながら、活動に広がりをもたせていく。 本事業において「がん」という医学が中心的テーマとなる中、文医融合の人間健康学部等も連携した研究テーマを支援し実践できたことは、新たな展開につながるものとなったことから、今後もこれらを継続し、さらに全学的な取り組みになるよう、文医融合の学部を足掛かりに、文系学部も巻き込み、また次代を担う学生の活躍・取り組みを社会へアピールするブランディング活動を展開する。また本事業の外部評価を契機として深まったメディアとの関係も広げ生かしながら、多角的な周知・広報につなげ、地域になくてはならない「がん治療・研究を中心とする研究拠点大学」としての存在感を高めつつ、地域への貢献を推進していく。